

環境科学部

環境生態学科のこの一年

小泉 尚嗣
環境生態学科長

学生の動向

2016年4月には30名の新入生を迎えることができた。進路再考のため1名が退学したので、2017年3月30日現在、1年生は29名である。2年生と3年生はそれぞれ31名と30名が在籍しており、4年生以上の35名の内、29名が卒業した。残った6名の内、休学者が3名いる。近年の就職状況を反映し、学生の就職率は良かった。

当学科では、3年生の後期に4年時の卒業研究を行うための研究室に仮分属される。「分属者ゼロの研究室を作らない、分属者数に上限(3人)を定める。」というルールのもとに、どの研究室に分属するかは、学生の自主性・自由意思を尊重するという事で学生同士の話し合いに任せてきた。2016年度は、3年生から「上述のルールを見直してほしい、分属の話し合いの過程に教員も参加してほしい。」という趣旨の要望が出され、教員側と学生側で話し合いの場を持った。教員側からは、当学科の仮分属決定のルール等について文書を配って学生に改めて説明した。学生同士の話し合いで決まらないときは、以前から必要に応じて教員が関与してきたことも説明した。かなりの議論があったが、最終的には学生側も納得し、期限を延ばした上で、従来のやり方で仮分属が決定した。このやりとりの中で気づいたことは、今までうまくいっていたやり方だから、新たな学生に対しても(説明不十分でも)うまくいくという思い込みは駄目だということである。学生の気質や理解力は毎年変わる。今回は、自主性・自由意思を尊重するという事で学生に委任していたつもりが、学生からは「丸投げ・無責任」と捉えられていた点が一番の問題だったと思う。仮分属といった事柄に限らず、学生への的確な説明を常に心がけることが大事であると痛感した。

教員の動向

本年度は、丸尾雅啓准教授が教授に、吉山浩平助教が准教授に昇任され、教育・研究に更なる貢献をしていただいた。2017年4月には、新任の工藤慎治助教を迎える。大気環境学が専門の新進気鋭の研究者で、学科の幅がさらに広がることとなる。着任前にお話を伺う機会があったが、ご自分の専門以外にも幅広い知識をお持ちである。2017年度から早速、集水域環境機能論と大気環境学等の講義を受け持っていただくが、受講する学生は充実した時間を過ごせることと思う。

学科の動向

2018年度から滋賀県立大学の第3期中期計画が開始されることに伴い、2016年度から学部再編の議論が本格的に始まり、その一環として環境生態学科でも学科再編の議論が行われた。主な論点は、学科名称・学科定員・育成する学生像である。育成する学生像については、従来の滋賀県立大学のキャンパスガイドに掲載されている「自然環境を総合的に理解するために幅広い基礎知識を学びます。これら基礎知識を基にして環境問題を解決するための応用力を身につけた野外科学のエキスパートを育てます。」という方向性に変更はないということになった。学科名については、「生態」が入っていることで、生物学に特化した学科であるという誤解を受験生に生んでいるという反省と、上述の育成する学生像を考慮し、「環境自然科学科」という名称に変更することになった。定員については、増やすかどうかについて議論があったが、結局現状の30名を維持するという事になった。変更点については2018年度以降に実施される予定である。また、学科再編の議論の過程で、当学科をどのようにアピールするかについても種々の意見が出された。その結果は、2017年度から全面的に更新された環境生態学科のホームページ(滋賀県立大学のホームページ→環境科学部のホームページ→環境生態学科のホームページ、または、<http://des-usp.com>を直接入力)に反映されているので、そちらも是非ご覧いただきたい。